

東京大学大学院総合文化研究科 グローバル地域研究機構中東地域研究センター  
[スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座]



# UTCMEES ニュースレター

## VOL.22 2023

1. 学びの寄港地	1	3. 駒場中東セミナー開催報告	15
(1) 村岡 静樹	1	4. 「山内文庫」の思い出	19
(2) 千坂 知世	4	5. センターの活動紹介	20
(3) 曾根原 健悟	5	6. スタッフ・発行者情報	20
2. この一品——私の研究モノ語り	8		
(1) 相磯 尚子	8		
(2) 砂田 恭佑	10		
(3) 田窪 淑子	12		

## 1. 学びの寄港地

現地に滞在することで新たに得られた「学び」をお届けする本コーナー。現地社会の価値観や感覚、留学先や旅先で出会った人々との交流、そして研究を通して得られた知見について、3名の執筆者にご寄稿頂きました。

(1) 心のなかにリトルオマーン人を育てる  
京都大学大学院文学研究科  
言語学専修

村岡 静樹

### 1. お詫び

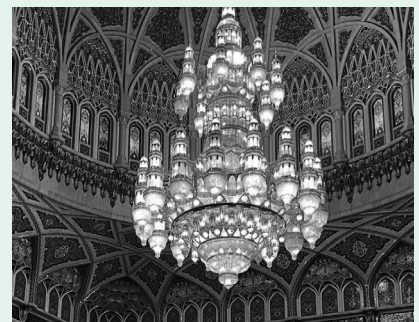
もしこれをお読みになっているオマーンの方がいらっしゃったら、表題の非礼をご寛恕たまわりたい。ぜひともリトル日本人を心のなかに育てていただければとこいねがう次第である。

### 2. 大好きなのはヒマワリの種？

とあるオマーン人が休暇中、ヒマワリの種がぎっしりと詰まった袋の写真に「せっ

かくの善行がだいなし袋」とコメントを付けてSNSに投稿していた。目にした同胞たちは腹を抱えて笑ったことであろう。いったい何がおもしろいのか、お分かりだろうか。

休日にヒマワリの種をポリポリかじりながら雑談する、すると人の悪口も出る、悪口は地獄行きの大罪とされている、などの背景知識がなければ、笑うことはできない。それどころか食用のヒマワリの種であるとは気づかないかもしれない。言語を研究する者は——慣用表現の諸相に関心を抱く筆者としてはなおさらのことと自戒をこめて述べるが——単に土地の言葉でヒマワリの種を何と呼ぶかのみならず、それが社会にどのように存在しているかにまで、気を配らなくてはならない。



### 3. かの地におけるあり方を理解する

食べ物のつながりで言えば、コメは日本でもオマーンでも伝統的な食卓の一角を占めており、事実、貴国の主食は何であるかと問われたならば、両国民は概してコメと答えるであろう。オマーン方言でコメを命と呼んだり（なお同じ語がエジプト方言ではパンを意味する）、安月給で食べてゆかれぬとぼやくときに「おコメを食べさせてくれへん」と言ったりするのを聞いた日本人は、オマーンにおけるコメのあり方に親しみを覚えるかもしれない。

他方、当然ながら、品種の異同はこの際おくとしても、彼我のコメのあり方には懸

隔も甚だしいのであって、例えば、オマーン人にとってコメとはあくまで香辛料をふんだんに用いて大鍋で炊き上げるべき穀物で、またかなり重い食事でもある。主食とはいえず、いわばその主食度は、日本人の感覚では多分にパン類に侵されており、日常生活でも「パンはパン屋」（餅は餅屋）、「自分で焼いたパンは自分で食え」といった慣用語が耳朶を打つこと著しい。しかもかの地において主として輸入品であるコメの来源を、店頭に並ぶ大袋より前にさかのぼることは実感として難しい（この大袋にはいかにも地域方言といった響きの呼称があり、生活上、基礎レベル語彙である）。

ゆえにオマーン人にとって、我らには典型的であるところのコメそれ自体を味わう白ご飯やおにぎり、あるいは朝っぱらから食堂が提供する焼鮭定食などはコメの風変わりな形態であり、また彼らの頭の中で、コメは炊飯器とも餅とも水田の匂いとも、秋の田の面を飛ばすトンボの情景とも結び付いていない。わが国の稲わら細工をオマーン人に説明するとすれば、むしろ彼らのナツメヤシ非可食部の伝統的利用になぞらえたほうが腑に落ちるであろう。

なるほど、青果店を見渡せば我々の見慣れた食品も鎮座している。しかし彼らはサツマイモを平らげて尻が出るとも言わなければ（玉子などがその汚れ役を担っているらしい）、ブルーベリーに視力向上を期待することもない（ニンジンがその榮譽にあずかっているようだ）。

さらに自転車はあっても、これを移動手段だと思ふ人はいない（子どものおもちゃかスポーツである）。うがいは、宗教的な浄めの作法か、喉の痛みを紛らわせる行為であって、風邪の予防のためという発想はない。女性が前髪をこしらえることは日本ほど一般的でなく、涙袋をわざわざ作る例は稀であろう。ことほど左様に同床異夢は枚挙にいとまがなく、無論、高等教育や報道の理想像といった抽象事についても同様である。一事が万事、社会におけるあり方を理解しなければ、それをまったく知らないに等しい。

#### 4. 動的等価の束として理解する

とはいえ、ファラーヒーディー通り——本居宣長通りとでも読み替えていただければ結構——に立ち尽くした筆者は異邦人であり、森羅万象をそのままかの地の人たちのごとく把握することはできない。そこで、それらを（筆者の認識する限りの）日本社会での対応物の束（たば）や類似物の変形として理解することは（筆者個人の体験の）整理術としてしばしば有意義であった。

彼らのナツメヤシは、歴史的に特権的地位を誇る作物としてはわが国のコメ的であるし、コーヒーの席に果実が甘味として供される点では茶菓子的であるし、落実が歩道を汚す街路樹としてはイチヨウ的であるし、繊維が日用品や建材に活用された点においては藁や茅のようなのである（したがって、クルアーンに約20か所、神兆や楽園の具体的描写にまでナツメヤシが現れるのを彼らが味読するとき、またオマーンの子どもの描く風景画にデーツがたわわに実っているとき、そこにそよいでいるのは決して我らのぼんやり思い描くエキゾチックな果樹ではない）。

金土曜を週末とするオマーン人の「木曜」は、その社会的効用を思えば——現に「花金」に相当する俗語も「木曜」という語を使うが——ほとんど「金曜」と和訳したいところである。某通信大手をいまだに「ナウラス」と呼ぶおじさんは一面において「電電公社」呼びの抜けないおじさんを彷彿とさせ、タンウィーンのヌーン字表記は一面において「こんにちわ」「やむおえず」のようである。

井伏鱒二は唐詩の「高陽一酒徒」を「アサガヤアタリテ大ザケノンダ」、「懐君属秋夜」を「ケンチコヒシヤヨサムノバンニ」と暢達に訳出し、固有名詞の呪文化からさえも免れてみせた。これに従えばオマーンのD県S地区は、奈良や網走などが束になったものとして理解されよう。日本人の夢想する花の都パリはオマーン人の思い描く大英帝国ロンドンであるかもしれない。

筆者はこのように対象社会における事物を動的等価（dynamic equivalence）の束として整理する態度が有用であると

信ずる。もっとも研究者が原詩を超えるような名訳を生み出してはならないが、固有名詞の翻訳は奇をてらった戯れなどではない。オマーン中興の祖たる先帝は、内外政においてカリスマ的才能を発揮したが、その事績は、魁偉な容貌、朗々たる話しぶりやファッションセンス等々の印象論的な記憶の諸断片とともに、「カーブース」という珍しくも深長に響く御名と絶妙に響きあって臣民の心に刻まれていることを指摘しておきたい。

#### 5. 事実関係とは別に人々の受け止めを理解する

筆者は、専門調査員として在オマーン日本国大使館に奉職するなかでも、社会におけるあり方を見極める重要性を認識した（本稿の文責は筆者個人が負うことをお断りする）。すなわち、事実関係そのものに勝るとも劣らず、事件を人々がどう受け止めているかが決定的な意味を持つのである。端的には、あるニュースがオマーンにおいてどのように報じられているか（あるいは報じられていないか）を東京に伝える、「当地報道ぶり」の報告という仕事がこれを象徴していた。報道やSNSを観察し、市民の声に触れ、彼らの物の見方に接近する。本田圭佑選手の「リトルホンダ」の響に倣って言えば、心の中にリトルオマーン人を育て、あるニュースに接したときにオマーン社会の反応を予測でき、また大使館からの発信をオマーン人の目線で推敲できる能力を養う。ちょうど、目新しい料理を口にしたとき、「ああ、この味は誰それ君が好みそうな風味」と直感するよう。かくしてわが方の国益に微力ながら貢献するのが任務であったと、自分なりに理解している。

人々が何を信じたがっているか、何を信じているかに注意を払い、ときに偏見や誤解まで自らのうちに意図的に再現できるようにすることは、ポスト真実の時代潮流に対する無力な追従などではなく、対象社会に対して科学的に肉薄するための積極的な行為であることを強調しておきたい。人間が論理的思考能力を持ち合わせていても、いつ論理的態度をとるか、いかなる方向へ論理を運用す

るかは、感情的に決定されているように思われる。いかなる切り口であれ、人間社会の正確な分析において感情的合理性 (emotional rationality) の視点を欠くことはできない。

## 6. 経験の有限さに謙虚でありつつも

現地で常に気にかかるのは、己の見聞や接する面々に均衡がとれているのかということである。大使館にもほど近い住宅街Kで、困窮した寡婦らからなる乞食集団が戸を叩くであるとか、「1時間なんぼ?」とあだついた声がかかるとか、つい二、三十年前まで水道が通っておらず青いタンク車が轟音を立てて給水に訪れていたといったことは、伝聞によってしか知りえなかった。それぞれ主として筆者の国籍、性別、時代が障壁となっている。

地域住民の素朴概念も一枚岩ではなく、「オマーン人ならみんなわかる。その部族名はシーア派で間違いあらへん」だの「オマーン人はみんな知ってる言葉や」だのと言われて、いざ確かめてみるとそうではなかったことも一度や二度ではない。

わが国でも同じようなものであろう。閏年を知らない日本人と、数の子を(食べたことはありながら!)知らない日本人に立て続けに会って以来、「この人間なら皆かくかくしかじか」という言説には警戒するようになった(ちなみに両人とも選挙は欠かさず投票する成人勤労者である)。それでも、筆者自身、外国人に「おせちは正月または大みそかに食べる料理ですよ」などと水を向けられてまともに確認の労をとる自信がない(北海道では大みそかに食する向きがあると聞きかじったが、どうも実感がわからない)。右も左も分からぬオマーンでは、経験の偏りが特定の印象を増幅してしまう危険を自覚しつつ、不断に新たな偏見を更新し続けるくらいの心持ちで、リトルオマーン人の適切性を向上させる努力が求められよう。

ところで、現地住民間での認識の相違や事実の誤認はそれ自体興味深いことでもある。首都マスカトの主婦が、筆者のとある単語の発音を聞きとがめて「そうは言わんのとちゃう……湾岸の人みたいで下品やさかい」と渋い顔をしたことがあるが、

当該発音はオマーンの一部でも聞かれるはずのものであった。ここに、湾岸協力理事会(GCC)の一員ではあっても成金どもと一緒にされてはたまらぬというオマーン人の自負の一斑を見出すことは、必ずしも無謀な飛躍ではあるまい。



## 7. 雑然とした実地体験の無用の用

わざわざオマーンに滞在し、雑多な見聞を通じてリトルオマーン人を育成することは、なかなか非効率的な営みである。「私は旅や探検家が嫌いだ」というレヴィ＝ストロースの慨嘆には共感を覚えてやまない。しかしながら、少なくとも「探検家」自身にとって、「旅」は雑然として迂路多きゆえにこそ勤所が養われるのだと、肯定的にとらえることも可能ではないだろうか。

雑多な体験は、定量化できぬまま眠っているものがほとんどである。かの地では心なしか一般家庭におけるホワイトボードの普及率が高いように思われるし、書店に並ぶ偉人伝にガンディー、マンデラ、ゲバラ、ヒトラーが妙に多いと感じる。街中の魚は絵も含めて偶然より高い確率で右を向いている印象がある。地獄谷で温泉に入る猿を描写するような状況では「人間のようだ」より「我々のようだ」のほうが多少好感度が高まる節がある。種々の背景に思いを巡らさないでもないが、結局これらは個人的な心証にとどまっている。

帰納の機会に恵まれなかった小話も数えきれない。M地区では愛する人を葬ったシャベルを担いで放浪する「シャベル担ぎのダーウッド」が長年の有名人であった。H山頂は貝の化石が出るが、地元ではクラーンの洪水伝説の証左だと言っている。Q地区のY氏は、全財産が風呂敷包み一つ

という路上生活の身であるにもかかわらず、筆者にコーヒーをご馳走しようとしてくれた(彼を故郷まで送り届けたときのこと。市街地では助手席からめっちゃくちゃな指示を出すので閉口したが——俗語の「まっすぐ曲がれ」がこれほどしっくりくるひどい道案内を他に経験したことがない——田舎に着いたとたん生き生きとして、「ほれ見い、あのイスブク(*Euphorbia larica*)、ええ薪になるわ、茶あ沸かすんやったらあれぐらいがええやろなあ」などと饒舌に語りだし、車を降りるとますます嬉しそうに、直径50cmは下らないであろう大皿2枚に果物を盛り合わせて夕闇の畦道をひよいひよいと身軽に歩いていた)。こんな思い出は今のところ地域住民との会話の糸口くらいにしか活用のしようがない。

しかしながら、これらの非体系的な蓄積も、いつの日か何がしかの論拠になりうると考えている。本稿冒頭にあげた一見単発的なヒマワリの種の冗談も、陰口をたたいてしまう人間の性が笑いの定番となる一方で、同様に悪徳と言えそうな吝嗇は少なくとも自嘲としては笑い話の素材になりにくいことと照らし合わせれば、文化学的な考察に資する見込みがあると言えよう。

現国王陛下の御代に生を受けた知友の次女Lちゃんは、筆者が帰国の途に就くころには礼拝の真似事をするまでに成長していた。「Lちゃんはどこや〜? Lちゃんはここや〜!」(いない、いない、ばあ)とあやされているこの幼子にとっては、筆者が初めてかの国に興味を持つきっかけとなった先帝カーブースも歴史上の一人物にすぎない。Lちゃんは新たな時代精神に生まれ、筆者のリトルオマーン人の素材となってくれた知友諸兄姉ともいくばくか異なる暗黙知と素朴概念を育て、将来のオマーン社会を構成していくのであろう。ゆく河の流れは絶えずして、と旧世代のオマーン人と感慨をともしつつ、かの地を辞去したのであった。

(2) スタンフォード大学在外研究中間報告  
日本学術振興会特別研究員 PD  
東京大学大学院総合文化研究科国際社会科学専攻  
千坂 知世

私は、2022年9月から約1年～1年半の予定で、JSPS特別研究員奨励費(21J00645)の一環としてスタンフォード大学Abbasi Program in Islamic Studiesにて在外研究の機会を得ている。イラン政治を専門にしながら、同大学を在外研究先に選んだ理由は大きく3つある。第一に、中東を含む地域研究と比較政治学(特に選挙権威主義研究)の両方に精通する研究者が数多く在籍するからである。第二に、イランでは入手しにくいペルシャ語資料が豊富に所蔵されているからである。第三に、中東地域や比較政治を専門とする研究者との幅広いネットワークを構築するためである。本稿では、これら3つの目的を中心に、約4か月間の「学び」について述べていきたい。

第一に、地域研究と比較政治学の学際的研究の推進である。この目的には私の研究背景が関連しているため、簡単に触れておきたい。研究テーマは、イラン・イスラーム共和制下の国会選挙管理である。大阪大学大学院在学中は約1年間の現地調査を実施するなど、イラン地域研究の立場から研究に取り組んできた。2021年10月東京大学に学振PDとして着任して以降、イラン地域研究で得られた知見を比較政治学における選挙権威主義の理論研究に応用することを試みている。

そこで在外研究を始めた秋学期(2022年9月～12月)には、受け入れ研究員Lisa Blydes教授(中東/権威主義研究)が、Beatriz Magaloni教授(ラテンアメリカ/権威主義研究)とともに開講する院生向けの「比較政治学」の授業を聴講した。本講義は、毎週テーマ毎にかされる課題文献(6、7本の論文/章)を事前に読み、全体で討論する形式で行われた。国家建設、政治体制、経済開発、内戦など比較政治学における主要テーマの先行研究をレビューする好機となった。

また、政治学系のセミナーやワークショップにも積極的に参加している。比較

政治関連のセミナーは、スタンフォード大学政治学部に併設されるThe Center on Democracy, Development and the Rule of Law(以下、CDDRL)が毎週1～2回の頻度で開催している。特に印象的だったのは、2022年11月に開催された「自由民主主義に対する権威主義の挑戦」と題するセミナーである。同セミナーでは、民主主義国での極右政党の台頭や自由経済の退潮など、近年政治分野の研究者や実務家から注目を集めている課題が議論された。CDDRL新旧所属の研究者が、権威主義研究、ヨーロッパ地域研究、開発経済学など、各々の専門分野の観点で先述の課題の要因や帰結を分析し、memo(ワーキングペーパーに近い)を報告した。最先端の研究動向に触れることは、現在の研究潮流の中で自らの研究の位置付けを確認する機会となった。



第二に、ペルシャ語資料を用いた研究の遂行である。そもそも、なぜペルシャ語資料の収集のためにイランではなく米国を訪れる必要があったのか。再び研究背景を述べると、私の研究では、イスラーム共和制(民選の大統領と非民選の宗教指導者「最高指導者」が併存する)という稀有な政治体制をとるイランにおいて、誰が、どのように国会選挙を管理し、それがいかなる政治的帰結(例:選挙ボイコット、抗議デモ、現職再選率)を生むのか、という問いを扱っている。これらのうち国会選挙管理の制度設計に関しては、イラン現地調査で得た資料を用いて分析が可能であった。しかし、情報統制の厳しいイランでは、国会選挙制度の運用に関するデータの取得にどうしても限界があった。制度を把握できたとしても、それが実際には誰によって、どのように運営され、その結果どのよ

うな問題が発生したのか(しなかったのか)、という実態に迫るデータは現地ではほとんど公表されていないのである。

それに対してスタンフォード大学には、イランの現体制指導部が公表を認めにくいペルシャ語資料が比較的多く所蔵されている。特に、国会選挙管理制度の運用を把握するために有用な資料として、Moṣṭafā Tājizāde, 1397[2018/9], *Ra'y-ye Mellat: Vezārat-e Keshvar va Showrā-ye Negahbāndar Entekhābāt-e Majles-e Sheshom [People's Votes: Ministry of Interior and the Guardian Council in Sixth Parliamentary Election]* (Tehrān: Enteshārāt-e Rūzne)が挙げられる。本書の著者モスタファー・タージザデーは、「改革派」政権期(1997～2005年)の1997～2000年に政務担当内務次官に任命され、2000年第6期国会選挙では選挙実施本部長(選挙実施の統括)を務めた著名な政治家である。本書の最大の特徴は、改革志向の強いタージザデーが、第6期国会選挙の運営中、保守的な監督者評議会(厳密には中央選挙監督委員会)に宛てた公式書簡が約400ページにわたり収録されていることである。本書は、2000年に限られてはいるが、イラン全国207選挙区において、選挙前(選挙管理委員の人選など)から選挙後(苦情処理や再集計・再開票など)にわたる選挙管理過程で、いつ、誰が、どのような問題に関与していたのか、幅広く渉猟できる。

また、冬学期以降(2023年1月～)、スタンフォード大学附属フーバー研究所(Hoover Institute)でのアーカイブ調査も予定している。同研究所には複数のペルシャ語新聞が所蔵されており、特に現体制との反目を理由に米国などへの亡命を余儀なくされた政治家や政党の機関誌が充実している。例えば、革命後の初代大統領アボルハサン・バニーサドル(1979-80)に近い機関誌「エンゲラーベ・エスラーミー(Enqelāb-e Eslāmī)」や左派系政党ファダイネ・ハルグ(Sāzmān-e Fadā'i-yān-e Khalq-e Īrān)の機関誌「カール(Kār)」など、現体制下で発禁対象のものが含まれる。いずれも発行期間は革命後第1回国会選挙(1980)のみであるが、革命直後の政情不安が続く中、「野

党」のような立場に置かれた政治組織が新体制の指導者らが運営する国会選挙に対してどのような異議を唱えていたのかなど、貴重なデータを提供するものである。

このようにペルシャ語資料の収集は概ね順調である。とはいえ、データの解釈は別の問題と言える。具体的には、イランのような権威主義国では選挙（不正）関連データの出所が体制側にせよ、反体制側にせよ、ある程度のバイアスが作用する（何を不正と捉えるかは人によって異なる）、と一般に言われている。ゆえに、論文などで引用する際には解釈の方向性に間違いがないか、慎重に分析を進める予定である。



第三に、研究者との幅広いネットワーク構築である。中東研究に関しては、受け入れ機関Abbasi Program in Islamic Studiesに加えて、Iranian Studies、Program on Arab Reform and Democracyにおいても中東諸国を専門とする常勤研究者、客員研究員、ポスドクが所属している。研究対象国（北アフリカ、湾岸アラブ諸国、イラン、トルコ）、専門分野（政治、宗教、歴史など）、分析手法（定性的、定量的）は多様であるが、基本的にはみな1年以上の現地調査経験を有する。

イラン研究に関しては、1950年代以降のパフラヴィー王政下のイラン外交史を専門とする若手研究者を対象とするフェローシップ「ザーヘディーフェロー（Zahedi fellow）」が用意されている。私が出会った第1期フェローはニューヨーク大学の院生であった。彼の専門分野であるイランや世界の共産党の歴史、彼自身の米国亡命までの経緯を聞くのは、とても新鮮で刺激的であった。

比較政治に関しては、ポスドクに対する充実したメンター体制の下、これまで論文

執筆やキャリアに関する相談を政治学に所属する教員らと行なってきた。その中でも受け入れ研究者Blaydes教授とは、研究の進捗に応じて面談することで、有益なフィードバックを得てきた。

加えて、私が大切にしているのは同じポスドク研究者との交流である。2022年度（2022年9月～23年6月）のポスドク（CDDRL所属）は、エジプトの宗教と政治、ロシアの官僚政治、ナイジェリアの地方政治、インドのジェンダー政治など、比較政治学の理論と実証を専門にする人が多い傾向が見られた。研究内容に関する意見交換はもちろんのこと、投稿論文や就職活動の進捗、研究助成の公募など、「同世代ならではの情報交換」ができることは、在外研究を続ける最大のモチベーションとなっている。ここで培ったネットワークは将来的に共同研究などで生きてくるのではないかと期待している。

以上、学際的研究の遂行、ペルシャ語資料の収集、研究者ネットワークの構築、という当初の目的を中心に述べてきた。それ以外にも、スタンフォード大学には当初の予想をはるかに上回る充実した研究環境が整っていることが分かった。本報告は、在外研究をはじめてわずか4カ月目のものであり、この先取り組みたい課題はまだ山積みである。残りの滞在期間も豊富な資料や人的リソースを最大限に活かしながら、研究活動に励んでいきたいと考えている。

### (3) アラビア海の風に乗って

東京大学教養学部3年

曾根原 健悟

私は2022年の7月から9月にかけて、オマーンのスルタン・カーブース・カレッジに留学しました。その後、オマーンから陸路でUAEに入り、トルコ、サウジアラビア、ネパール、タイと渡り、9月末に日本に帰ってまいりました。この一連の体験は、海外への渡航の経験がほぼ皆無であった私にとって、非常に大きな価値観の変化をもたらしました。

最初に留学のお話をいただいたのは、濱田聖子先生のアラビア語講読の授業を履修しているときでした。どうやら15年ほどの歴史があるプログラムのようですが、東京大学に公募の案内が来たのは初めてであったようです。ただし、東京外国語大学からは日本人の学生がこれまでに何人が参加していたようでした。

この留学プログラムは年5回開催され、8週間（夏のみ7週間）の日程で、平日はおもに正則アラビア語（フスハー）の学習、休日はオマーン東部各地の観光ツアーという構成になっています。学校と寮はマナというマスカットから200km程離れた片田舎にあり、周辺の娯楽施設といえばコーヒーショップとサッカー場くらいのものでした。ただし、週に数回買い出しのためニズワという近くの大都市に連れていかれるため、そこで映画や買い物を楽しむことができました。また、公共交通機関は皆無ですがタクシーは走っているため、自由時間に遠くへ遊びに行くことは可能でした。



午前中には4技能のアラビア語学習があり、午後には会話練習の機会が設けられていたり、ちょっとしたイベントがあった

りました。毎回の週末にはバスで観光スポットに連れて行ってもらったり、本格的なスタジアムでサッカーを楽しんだりしました。とはいえ、これらに参加するか否かは自由であり、常に寮で寝ていたり、研究をしていたりする学生もいました。

寮は基本相部屋でしたが、追加料金で一人部屋に変えることもできました。私のルームメイトは非常に優秀な北京大学の学生で、彼との対話はとても刺激的なものでした。寮の設備は概して申し分なく、トイレトーパー等も完備されていました(少なくともオマーンでは、大規模なモールや大学などでもトイレトーパーがないことが多いです)。食事は三食バイキング形式でした。乾燥地帯特有の蠅の問題を除けば、勉強に打ち込める環境は十分に整っていました。

学生の多くは20代で、30人ほどが参加していました。そのうちの日本人は、私と東大の東洋史の学部生、オックスフォード大学の大学院生の3人でした。このプログラムでは、イギリス人とカザフスタン人、韓国人が多くを占めていました。

授業については、上級・準上級・中級のレベルに分かれており、日本人3人は全員中級コースでした。オマーン人の先生からフスハーで授業を受けるのが基本でした。文法、語彙、読解、聴解、作文、発表など様々な能力を楽しく向上させる授業内容になっており、カリキュラムがしっかりと練られていると感じました。学校には図書館が設備されており、著名なアラビア語資料やオマーンについての本・雑誌等がそろっていました。授業の間にはカフェでほかの留学生と談笑していました。ただし、湾岸地方の人々が話す方言(アーンミーヤ)に触れる機会が少なかったのは少々残念でした。

4技能の中でも、リスニングとスピーキングにはかなり苦労しました。私の場合、日本では文法と読解ばかり勉強していたため、アラビア語で意見を述べたり、ニュースを聴き取ったりする演習では周囲に後れを取っていました。こうした弱点は、学校が雇ったオマーン人のランゲージパートナーや、ほかの学生などとコーヒー

やデーツを味わいながら会話することで、徐々に慣れていきました。

課外活動については、非常に充実した体験を多くすることができました。週末の観光ツアーでは、一週目に古都ニズワへ、二週目に歴史的なバフラーへ、三週目に東部のスールへ、四週目にオマーンの誇りジャバル・アフダル(緑の山)へ、五週目に首都マスカットへ行きました。そこでは多くの場合、観光地の職員の方が綺麗なフスハーで説明をしてくれたため、勉強しながら観光することができました。

文化的な側面では、敬虔なムスリムが多いオマーンにおいて、宗教的なタブーを感じたことが多くありました。酒や豚肉などは禁止ではありませんが、田舎には流通していません。それでこそ、マスカットで飲んだバドワイザーの美味たること。と喜んでいたら、隣の卓のオマーン人男性が、タオルに包まれたグラスをウェイターから受け取っていました。よく見ると、飲み口からはかるうじてビールの白と黄色が確認できました。なんとオマーン人が外で飲酒する際には、グラスの中身が見えないようになっていたのです。

他にも、寮のラウンジで学生たちと一緒に韓国ドラマを観ていたときのことです。キスシーンに差し掛かった途端、オマーン人の寮長がテレビを消してしまいました。多くの場合アラブ人は不純異性交遊に厳格で、デートの風習がないほどです。その一方、マスカットやスールでいかにもな怪しい店を見つけたこともありました。

ともかく、中世以降のイスラム文化がここまで残っている国もあまりないと思います。特に田舎では、国をあげて歴史的建造物や伝統的な街並みを残すなど、文化保全に取り組んでいるようです。一方都会は様々な人々が入り乱れ、雑多な印象を受けました。そのため、都会と田舎の様相が大きく異なるというのも面白い点でした。

オマーンの特徴として、外国人労働者の存在があります。湾岸産油国に顕著なのが、ホワイトカラーの職業を自国民が独占し、東南アジアや南アジアを主とする外国人労働者が現地人のあまり就きたがらない職を占めるという現象です。オマーンでは人口の半数程度が外国人労働者で、それ

ゆえに都市部では様々な国籍の人々が入り乱れているのです。これはUAEやサウジアラビアでも見られる現象ですが、後述の通りそれぞれの国で微妙な違いを感じました。余談ですが、留学先の学校や寮では、オマーン人の学校職員のほかに清掃や調理に従事するバングラデシュ人が多く勤務していました。



さて、オマーンでの7週間もつつがなく終わり、バスでドバイへ向かいました。バスは飛行機の一割ほどの運賃でしたが、途中イエメン人の乗客がUAEとの国境で降ろされたり、側面の扉が閉まらず荷物が落ちそうになっていたり、日本では遭遇しないような場面もありました。

ドバイに到着し、例に漏れず遊歩を楽しみます。昼は最高気温50度の中、メトロを駆使して熱中症を防ぎつつ、できる限り建物の中を歩きます。治安のいいドバイでは、夜は絶好の遊歩チャンスです。特に建物は圧巻で、煌びやかで巨大なビル群に迎われます。ドバイはオマーンよりも現地人と移民労働者の格差が顕著であり、普通に外を歩いていても外国人のブルーカラーワーカーとしか会いません。現地人は、モールや高級なカフェなど、現地人(と、海外のビジネスパーソン)しかいない場所にいます。同じようなシャワルマでも、移民用のレストランとアラブ人御用達のファーストフード店では、3倍以上の価格差がありました。フィリピン人の女性従業員にアラビア語で注文をしながらドバイ人と英語で話すおかしさに、ドバイの光と影を感じました。

次に、トルコのアンカラに飛びました。地中海性気候であるトルコの夏に遊歩を楽しまない選択肢はありません。疲れたらトルコ料理をビールで流し込みます。トル

コはイスラームの国とはいえ、飲酒が盛んな国です。メイハネというトルコの居酒屋には安価でおいしいビールや蒸留酒がそろっており、二か月ほどほとんど禁酒であった吞兵衛の私には天国のような場所でした。一日目に大きくはないアンカラの街を歩き倒し、二日目には仲良くなったイラク人のウマルにアンカラの観光地を案内してもらいました。トルコにいながらアラブ人の温かさを感じ、大満足でイスタンブールに飛びました。

イスタンブールはアンカラと比べ広大で、治安があまりよくないため、メトロやバスを駆使して街を回ります。世界有数の観光名所なこともあり、どこにいても華やかで美しい場所です。途中でトルコ第四の都市ブルサにバスで向かい、名物である大浴場を満喫するなど、非常に楽しい時間を過ごしました。

一方トルコは失業者の急増、シリア内戦によるシリア人難民の流入、トルコ・クルド間の関係性の悪化などといった問題を抱えています。こうした社会情勢がスラムの形成や物乞い・詐欺の増加につながり、治安が悪化しています。そういったところを実際に感じられたこともまた大きな財産となっています。余談ですが、記憶に新しいイステクラール通りの爆破テロが起こった場所は、宿泊していたホテルの目と鼻の先でした。

その後、ジェッダに向かいます。ジェッダはサウジアラビア第二の都市で、イスラームの二大聖地であるメッカとメディナにつながる場所です。この場所は、「宗教に厳格な金持ち国家」という想像と現実との差が大きい都市でした。空港で入国審査が厳密になされるわけでもなく、ヒジャーブをつけていない女性も散見されました。歴史的な街並みが多く残っており、市場やモールでは多くのサウジ人が男女問わず商売をしていました。そしてなんといってもアラブの素晴らしいところは夜の治安がいいところです。ジェッダの中心街をふらふらと歩き、通行人や店員と話す中で、東アジア人がアラビア語を話すのが面白いからか、多くのサウジアラビア人が会話に参加してきました。サウジアラビアは、思っていたよりもはるかに面白い場所だとわかりました。

ここで中東に別れを告げ、ネパールのカトマンズに飛びました。ネパール人の多くは、朝食・夕食にダルバートと呼ばれる定食を食べます。私はこれが好物で、オマーンでは日本食よりダルバートが恋しくなっていたほどです。タイではバンコクとアユタヤで観光し、幸福感に包まれながら日本に帰りました。途中で曼茶羅を売りつけられそうになったり、タイで偶然オマーン人と仲良くなったり、デング熱に感染し日本で1週間入院するなど様々なことが

ありましたが、紙面の関係で割愛します。

ネパール・タイでは日本人が珍しくないこともあり、中東にいるよりも人々が自然に話しかけてくれました。とはいえ、それは中東に慣れた私にとって一抹の寂しさを感じさせるものでもありました。逆に言えばこの二国は日本人が非常に過ごしやすい国であり、英語もよく通じるため、実家のような安心感を覚えていました。

最後に、この旅を通じて最も感激したのはアラブ人の温かさでした。特にアラビア語を話す者に対しては、彼らはまるで兄弟かのように接してくれます。関わったアラブ人を列挙すると枚挙に暇がありませんが、多くの人が見返りなしに食事やコーヒーをご馳走してくれたり、商品を割引してくれたりしました。アラブには日本のようなおもてなしの文化があります。今回の旅では、こうした来客をとことん歓待する態度に何度も助けられました。日本では何かと事件報道で言及されがちなイスラームやアラブですが、人々が優しいことや政情が安定していれば治安がとてよいくことなどはあまり知られていません。今後、ほかの地域もそうであるように、日本とアラブ諸国の関係性はより密なものとなるでしょう。その頃には、多くの日本人がイスラームとアラブに対する偏見や差別を捨て去り、よりよい関係を築いていることを祈っています。

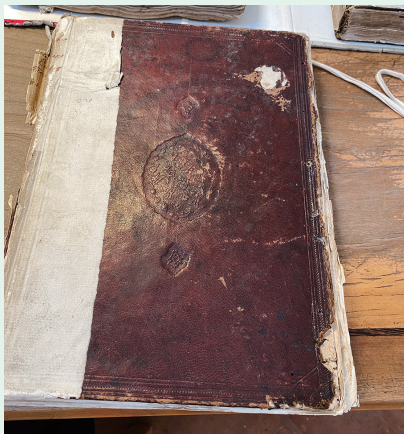
## 2. この一品——私の研究モノ語り

自身の研究に深く関連する「モノ」にまつわるエピソードをご紹介いただく本コーナー。今号では、過去から現在に至るまでの膨大な時の流れを感じられる、3つの「モノ語り」をお届けします。

### (1) もうひとつの「研究モノ」：二つの台帳にみる近世オスマンの海

慶應義塾大学大学院文学研究科

相磯 尚子



#### 触れない文書

私は16世紀末から17世紀前半のオスマン帝国における海事史をテーマに、研究を進めている。特に海軍に着目して、オスマン文書館に残されている行政文書を用い、海軍に携わった人々が、どのような人々であったのかを明らかにしようと奮闘している。いま私が毎日向き合っているのは、『枢機勅令簿 *Mühimme Defteri*』と呼ばれる史料群である。これはオスマン帝国のスルタンから出された勅令の草稿の控えを集めた台帳だ。2018年から2021年にかけてトルコ共和国へ留学した際に、イスタンブルにあるオスマン文書館に通い、デジタル化された史料のデータを購入して集めたものを利用している。今やすっかりデジタル化が進んだオスマン文書館では、通常、史料の現物を見たり触ったりする機会はない。現物を見る機会を失った

代わりに、閲覧室のパソコンに座りさえすれば、膨大な量の史料にアクセスすることができる。史料によってはキーワードで検索でき、調べたい年代で史料を絞ることもできる。ワンクリックで別の史料フォンド間を行き来することもできる。近年では、海軍博物館司令部所蔵の史料もオスマン文書館内のパソコンから閲覧することが可能になり、その利便性は向上する一方である。しかしながら、文書研究を専門としながら、その対象である文書に一度も触れたことがないということには、もどかしさと共に、一種の後ろめたさも感じていた。

#### 「研究モノ」との初対面

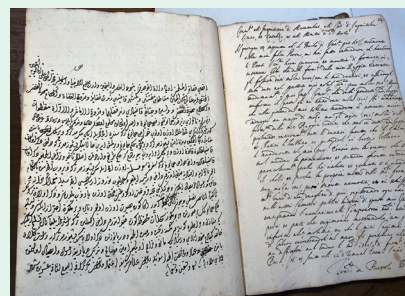
こうしたなかで、2022年の夏にヴェネツィアへ調査に行く機会を得た。国立ヴェネツィア文書館に残されている多くのオスマン語史料と、オスマン海軍に関する記述のあるイタリア語史料を調査するためである。しかも何と、ヴェネツィア文書館では申請が通れば現物を出してもらえるとということだった。

縦横無尽に走る運河と狭い石畳の路地に興奮しながら、ヴェネツィアの街並みを抜けて行くと、教会の前の開けた場所の端に文書館の入り口を見つけた。かつて修道院であったという建物を利用した文書館は、とても雰囲気があり、美しい場所だった。様々な人に助けて頂きながら、入館手続きと利用手続きを済ませ、館内から自分のパソコンを通して史料の閲覧を申請した。私が申請したのは「イスタンブル領事 *Bailo A Costantinopoli*」と呼ばれるフォンドの史料である。これは、多くのオスマン語史料が含まれていることで知られているフォンドだ。

1時間ほど待って、申請した資料をカウンターへ受け取りに行くと、紙製の史料の箱をぞんざいに投げ渡された。400年前の史料の扱いとは思えない渡し方に面食らいながらも、閲覧席へ史料を運び、ワクワクしながら箱を開けた。すると、中から出てきたのは革製の表紙を持つ台帳であった。この革製の表紙には見覚えがあっ

た。そう、台帳の表紙は、私が毎日ずっと取り組んでいる『枢機勅令簿』の台帳と、とても良く似たものだったのである。表紙を開いてみると、美しいマーブル紙の見返し紙にほんのり光沢を持つ厚紙が何ページも続く。そこに書いてあるオスマン語の筆記体も、見慣れたものだった。これが、全く同じモノではないにしろ、デジタルでしか見られなかった私の「研究モノ」に、6年目にして初めて直接触れることができた瞬間だった。

しかしこの感動は、次のページをめくった瞬間に、疑問と好奇心で吹き飛んでしまった。何と台帳には、イタリア語とオスマン語の両方が書かれているではないか。最初にオスマン語で文章が書いてあり、その後その翻訳と思しきイタリア語の文章が続き、また別件と思しきオスマン語、と交互に続いていく。1ページできっちり終わることもあれば、ページの途中から書き出しているものもある。台帳の後半には、新品のノートを用意したものの最後まで使いきれなかったような、白いページが大量に残されていた。『枢機勅令簿』は、書かれた文書を後から製本したものであるため、こういうものは見たことがなかった。外側の見た目は似ているのに、台帳の成立過程が全く異なることに驚いた。



イタリア語の筆記体には詳しくないが、オスマン語の方は見慣れたものである。ヴェネツィア文書館の書簡類に紛れているような、明らかにアラビア文字の書き方を知らない者の手によって写され、部分的に読めなくなってしまっているようなものとは異なり、オスマン語の書記術を心得た者によって書かれているように思われた。イタリア語の方は判別しかねるが、少なくともインクの色が異なっており、別の



筆記具によるものだと分かる。さらに、固有名詞はなんとか判別できる程度のイタリア語力で文書を眺めていると、どうもオスマン語の方で「何処そこの県軍政官」などと職位だけ表記されているものが、イタリア語だと「何処そこの県軍政官、何某」と名前まで補われているようだ。オスマン語史料ではほとんど明記されることがない船の名前も、ヴェネツィア船の場合であれば、イタリア語の方には書かれているようだった。つまり、オスマン語を理解できた上で、両国の事情に精通する人物がこの台帳の作成に関わっているのではないかと考えられた。

### オスマンの海における海賊と海軍

調べてみると、この台帳は在イスタンブールのヴェネツィア領事が、イスタンブールの館で作成させた、オスマン文書の控え集であるということが分かった[堀井, 2019]。この史料を『ヴェネツィア領事の台帳：1589-1684』として紹介し、史料のオスマン語部分を現代トルコ語へ要約したムムジュによると、オスマン文書がこの台帳に書き写してイタリア語訳を書いたのは、ドラゴマンと呼ばれる通訳者であったという[Mumcu, 2014: 34]。

在イスタンブールのヴェネツィア領事は、この台帳を参考にしながら、オスマン帝国とヴェネツィアの間に生じるあらゆる外交上の摩擦に対応した。とりわけ16世紀後半から17世紀初頭にかけて重要性を増したのが、バルバリア海賊に関する問題だった。バルバリア海賊にヴェネツィア人の船が襲われることが頻発したため、ヴェネツィアは何度もオスマン帝国のスルタンに対して、この問題に対処するよう訴えた。これに対してオスマン政府は、バルバリア海賊の掠奪を禁止させるのではなく、友好国であるヴェネツィアの人々への掠奪を止めるように、また、海賊たちの捕虜となっているヴェネツィア人を解放するように通達する、という手段をとった。だが、このやり方では、バルバリア海賊による被害を根本から無くすことには至らなかった。このやり方は、18世紀にも見られた[末森, 2022]。

オスマン帝国がこのような中途半端な

対応をとったのには理由があった。それは、バルバリア海賊がオスマン帝国を支えていた側面があったためである。彼らは、掠奪した物の一部をスルタンへ上納した。また、有事の際には船団を組んでオスマン海軍に合流し、オスマン帝国の海軍力を担う存在でもあった。

バルバリア海賊たちもまた、オスマン帝国を利用して。彼らは、掠奪して得た財産を元手に自らの一派の船団を拡大させ、より大規模に掠奪を行なうことを繰り返して財産を蓄えた。そして、オスマン帝国の有力者たちに賄賂を送ってパトロネージ関係を構築し、有力者の口利きのもとにオスマン帝国内の官職を得ようとしたのである。

特に海賊たちにとって重要であったのは、エーゲ海沿岸部を占める島嶼州の県軍政官のポストであった。『枢機勅令簿』には、ロードス島やエヴィア島、レスボス島などに置かれた島嶼州の各県へ、県軍政官としてバルバリア海賊が任命された様子が記されている。こうした海賊出身の県軍政官たちは、北アフリカのバルバリア海賊よりも頻繁に、ほぼ毎年のようにオスマン海軍へ加わることが命令されていた。

同時に、海軍もまた掠奪することがあった。ヴェネツィアで閲覧した台帳のなかにも、オスマン海軍によってヴェネツィアの商船が掠奪されたことが記録されていた。この一件も他の海賊被害と同じように、積荷と奴隷の返却をヴェネツィア領事が求めただけで、特段騒ぎ立てることもなかったようだ。このように、近世のオスマン帝国では、海賊も海軍も、掠奪をするという一点をとってみれば、同じ行いをしていたのである。



### 文書に触れて

オスマン語とイタリア語という二つの言葉で、一人の人間が同じ内容について書いたというヴェネツィア領事の台帳に直接触れられたことは、私にはとても衝撃的な経験だった。一見異なる二つの言葉で書かれた同じ内容の見開きのページは、まるで、その時の都合や文脈で、同じ人物を海賊と言ったり海兵と言ったりする様と似たものを感じられた。オスマンとヴェネツィアという二つの勢力のはざままで生きていた人々に、直接触れることができたような気もした。

ヴェネツィアでの資料調査において直に史料に触れて以降、オスマン文書館で得たデジタル化された史料データを見ると、その紙の質感やインクの反射などが自然と思ひ浮かぶようになった。あのとき閲覧席で、書き手についてや史料が作られた経緯などを想像して、より生き生きと身近に感じられた記憶も蘇る。そうして、海軍や海賊といった属性が、ある一点から見たものであり、その時代に生きた人々の一側面にしかすぎないことを、自戒を込めて改めて思い直すのである。

最後になるが、ヴェネツィアへの資料調査は日本学術振興会による助成を得て実現したものである。また、オスマン帝国とヴェネツィアの関係史をご専門とされるI先生には、ヴェネツィア文書館の使い方を教えて頂くなど、大変お世話になった。ここで改めて感謝申し上げます。

### 参考文献

末森晴賀「17世紀末～18世紀初頭におけるオスマン朝の「海賊」—対ヴェネツィア関係の中で」『日本中東学会年報』38巻1号、2022年、31-59頁。

堀井優「オスマン帝国下のヴェネツィア領事網」『ヨーロッパ文化史研究』20号、2019年、29-33頁。

Mumcu, Serap, *Venedik Baylosu'nun DeFTERleri: 1589-1684*, Venezia: Edizioni Ca' Foscari, 2014.

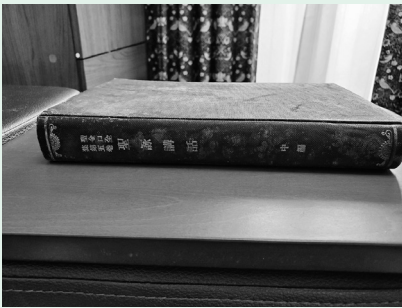
## 【私の研究室】

慶應義塾大学大学院・文学研究科  
史学専攻東洋史学分野では、歴史学  
をディシプリンとして、各院生がそ  
れぞれの関心に沿って研究を進めて  
います。特にさまざまな資料の読み  
方や、史料との向き合い方について、  
丁寧な指導が受けられる環境だと感  
じています。大学図書館のイスラ  
ム史関連書籍の豊富さも魅力です。

## (2) 『聖詠講話』の旅路：ある古本のプロ フィール

東京大学大学院総合文化研究科

地域文化研究専攻博士課程 砂田 恭佑



「主よ、我が心を全うして爾を讚榮す」  
『全うして』とは何を意味するか。周到  
なる準備と熱心とを以て俗務を離れて向  
上し、肉の桎梏（ママ）より靈を自由に

ての意なり。  
——<sup>きんこうイオアン</sup>聖金口約翰「第百十聖詠講話」  
一節およびその註解（木村英吉訳）

修士課程という時期はしばしば物心両  
面において人間の健康を損なう。同年代の  
面々が就職し経済的自立を始めるなか自  
分一人が学びを口実に身を横たえて扶養  
者の脛をかじっているような錯覚に陥る。  
肉の桎梏を逃れるとすぶいても生活習  
慣は荒廃するばかり。修士2年目の秋に日  
本学術振興会研究員DC1に内定したとの  
報せを受けたのは、私自身にとってこの上  
なく幸いなことであったが、しかしかくも  
門の狭い支援に望みをかけずとも物質的  
に、かつ精神的に落ち着いて研究ができる  
環境が後輩たちに提供されることを願っ  
ているし、そのための尽力ならば厭うま  
いと心に決めている。それはともかくそう  
した二年間を走り切った時点で私の預金  
は尽きていた。2019年（博士1年目）の  
5月19日、二か月分の給与が振り込まれ  
ることになっていた日の前日、そして私の  
25歳の誕生日に、預金額のほぼ全額であ  
る五千円を握りしめて神保町に赴いたの  
は、翌日からいよいよ安心して新たな課  
程を走り始める自分へのヤケ気味の前祝  
いであったといえる。しかしそこで偶然  
に、今回紹介する一品、<sup>きんこうイオアン</sup>聖金口約翰『聖詠  
講話 中編』（木村英吉訳）に出会ったので  
あった（上編は置いていなかった）。明治  
四十四年（西暦1911年）発行の文字通り  
の「古本」である。背表紙に触れていると、  
経年劣化した緑色が手に付くので、普段は  
古本屋でもらったカバーをかけている。

## 『聖詠講話』と金口イオアン（ヨアンネス・ クリュソストモス）

まずは<sup>きんこうイオアン</sup>聖金口約翰について説明せねば  
なるまい。イオアンとは日本正教会式の音  
訳で、ヨハネスあるいはヨアンネスのこ  
と。金口、つまり金の口を持つ、という称  
号が冠せられるヨアンネスとは、4世紀後  
半から5世紀初頭を生きたキリスト教聖  
職者・説教者をおいて他になく、普通には  
ギリシア語を古典式に音訳して「ヨアンネ  
ス・クリュソストモス」と呼ばれる。347  
年頃、ヘレニズム時代以来の巨大都市で、

ローマ帝国領シリアの中心都市となっ  
ていたアンティオキア（現トルコ、アンタキ  
ヤ）に生を享ける。それなりの家に生まれ  
たが父を早くに亡くし、敬虔なキリスト教  
徒の母親の手で育てられた。現在までその  
演説が残っている修辞学者リバニオスや、  
後述する「アンティオキア派」の立役者で  
聖書解釈に長けたディオドロスらに学び、  
母が亡くなったあと修道生活に身を投じ  
る。しかし厳格な生活実践により体の健康  
を損なったらしく、都市に戻り聖職者の道  
を歩むこととなった。386年に司祭に叙  
階されてからは修辞学の素養とキリスト  
教の教えを敷衍する話術の巧みさで評判  
を取ったが、このことで後世「金の口」（ク  
リュソストモス。ロシア語ではズラト  
ウスト）と呼ばれるようになったのであ  
る。このようにその生き方と著述を通して  
キリスト教の教えを後世に伝えた人々を  
教父（正教では聖師父）と呼ぶ。

『聖詠講話』——これも日本正教会式の訳  
である。学术界の標準的な訳を適用すれ  
ば『詩篇講解』あたりか——は、このアン  
ティオキア期の、脂の乗ったヨアンネス  
が著した説教形式の著作であり、旧約聖  
書『聖詠』（以下「詩篇」）を逐一引用しつ  
つ註解するものである。『詩篇』はイスラ  
エル王国時代の詩歌を集成した一書であ  
るが、単なる歌ではなくむしろ後世の出来  
事、とりわけキリストに関することを預言  
した預言書としてキリスト教徒にも受容  
された。しかしヨアンネスは本著作におい  
て、詩篇のうちに直接キリストを読み取る  
ような解釈をほとんどせず、むしろダビ  
デ時代やそのすぐ後の出来事を歌う詩篇  
として釈義を行う。このような釈義の方法  
は、「アンティオキア派」と呼ばれる人々  
の聖書註解の特徴である（一般に「歴史的  
解釈」と呼ばれる）。また詩篇本文を批判  
的に取り扱い、ギリシア語の細かい表現に  
もこまめに言及するが、これも「アンティ  
オキア派」によく見られる（一般に「字義  
的解釈」と呼ばれる）。例えば、『義者の集  
義の中、及び會の中に主の所業は大なり。  
彼の全意を以て整全へられたり』（第百十  
聖詠 [=詩篇第111篇] 二節。底本の関係  
で正教会が用いる『聖詠経』とヘブライ語  
聖書由来の『詩篇』では番号に多少のずれ

があり、ヨアネスの引用する聖詠も含めて本文もしばしば異なる) という詩句のうち「整全へられたり」を説明するにあたり、ヨアネスはまず、詩句の前半は人間の行為について語るものであるのに対しこの部分は被造物全体に対する神のはたらきを歌うものであるとする。そして「他の譯者」による本文「研究せられ」を引いたうえで、自分の言葉を重ねて説明する(木村訳では両者の区別があいまいになってしまっているが)。旧約聖書のギリシア語訳としてはいわゆる「七十人訳聖書」だけでなく、紀元1-2世紀に成立したアキュラス訳、シュンマコス訳、テオドティオン訳として伝わる訳文も存在した。「他の譯者」の本文とはこのうちのどれかを指すのであろう(他の註解者による言及がなく特定しえない)。創造主の周到なる工夫により、自然物の「天性」「法則」からおのずと神の意志をおしはかりうる——ヨアネスの他の著作にも現れる教説がここでも語られる。

「アンティオキア派」が特定の教育・研究施設に基づく真の意味での「学派」でないことは既に定説となっているが、そのうえで明らかに同じ傾向を有している。ただし、具体的に誰を「アンティオキア派」とみなすか、彼らが共有する特徴の起源や影響元は何か、という点では研究者の中で議論がある。私自身、修士課程で「アンティオキア派」に数えられるキュロスのテオドレトス(393頃-458頃)の『詩篇註解』を中心に分析し、その後も「アンティオキア派」研究を進めているのであるが、それはともかく、先にみたヨアネスの切り口が「アンティオキア派」的であることには疑いがない。他方で「爾は闇黒を見るか……爾は光の如何に輝くを見るか」(第百十一聖詠四節註)、「如何にして懼れざるか」(同五節註)のような聴衆への問いかけを交えていくのは別の一面、一流説教者たるヨアネスの流儀を反映しているといえよう。以上の理由から、この著作が単に座って読むための註解書でも、大衆に向けた説教でもなくて、聖職者やその候補を教育するためになされた講話を書き下ろしたという説を唱える学者もいた(R. C. Hill)。だがテキストの背後にある実践を

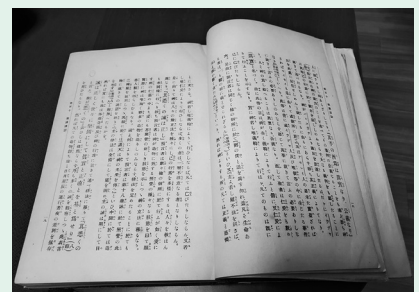
そこまで具体的に特定できるかどうか、特定すべきなのかどうかは疑わしい。むしろテキストそのものの効果に焦点を絞り、説教という枠組みを一種の仮想とし、ヨアネスは自身の解説を付すことで詩篇の含む教えを読者に印象付け、かつ聖書註解の能力と説教者としての資質を同時に示そうとしている、などと分析しておく方が堅実であろう。いずれにせよ、このような教父による聖書註解書は、その存在も重要性も日本ではほとんど知られていない。「アンティオキア派」による聖書註解に絞れば、英語圏においてすら今世紀になってからようやく現代語訳が充実し始めたといつてよい。『聖詠講話』を現代語訳と呼んでよいかは意見が分かれようが、かくも貴重な明治期の訳本が私の手に入ったのは不思議な縁のなせるわざである。それではなぜこの文献が明治期に訳されたのか、そこを少しばかり掘り下げてみよう。

#### 「モノ」としての『聖詠講話 中編』——明治期の「聖師父」翻訳

既に確認したように、訳文は明治期の文語による。註解対象である『聖詠』を含む正教会訳聖書では、プロテスタントの流れを引く文語訳聖書(『明治元訳聖書』など)で和語が巧みに用いられているのに比べて、漢文に由来する用語が用いられている、といわれる。教理や教会に関する用語も独特で、しばしば原語であるギリシア語のニュアンスを残している場合がある(西方教会の「典礼」に対応する用語「奉神礼」は、liturgyの語源であるギリシア語レイトゥールギアの「奉仕」という意味を反映する)。聖イオアン——ヨアネスの講話も、聖書本文よりは柔らかいが格調高い文語のうちに味わい深い訳語が散りばめられている。先ほども取り上げた第百十聖詠七節「其手の所爲は眞實なり、公義なり」に対する釈義(木村訳18-9頁)から単語を拾ってみよう。

ヨアネスはこの詩句について、神が「義鞫」によって法を四角四面に適用するばかりでなく、また「仁愛」により人を許すだけでもなく、「矯正法」を用いることを歌っているのだ、と説く——義鞫(τὸ δίκαιον)は明治元訳のニテサ1:5で用い

られている「義鞫(ἡ δικαία κρίσις)」が音読みされていて面白い。このように神の人々に対する「照管(κηδεμονία)」には二種類がある——「照管」とは欧陽脩(1007-72)や道元(1200-53)も用いた語彙で「気を付け、世話すること」。このような神の意志がその「休徴(τερραστία)」や奇跡、神の行為全般にも表れている——この語は「休徴」という字で大宝賊盜律1謀反条(718)にも出る語というからすごい。意味は「超自然的なしるし」。いずれも見慣れぬ単語ながら元来の含意を充分反映しているように見える。訳者の木村英吉とはどのような人物だったのだろうか。



その手掛かりが、日本に正教を伝えた聖ニコライ(1836-1912)の『日記』に見える。ニコライは1900年12月31日の時点で、教父(聖師父)著作の日本語への翻訳を新世紀の展望として語る(中村健之介監修、熊野谷葉子・三好俊介・半谷史郎訳『宣教師ニコライの全日記』6巻222頁)。正教の伝統において、聖師父の著作は聖書を正しく解き明かしたものととして聖書に劣らず、それどころかそれと並ぶほどに尊重されてきた。信仰としてこれをどう評価するかはさておいても、ひとつの精神伝統、地域的思想文化を理解せんとするならばこの点を押さえることが重要である。ともかく話はそのあと実際に動いたようで、1901年9月11日にはニコライが木村——洗礼名付きでイサク木村と呼ばれている——によるヨアネスの著作の訳文を実見し(同7巻37頁)、1904年10月25日の日記には聖詠講話の分冊を校閲したとある(同8巻137頁)。訳文の質にも満足したようで、「これはのちのちまで残る書物になるだろう」と期待を込めている。「ペテルブ

ルグ神学大学の新版金口イオアン著作集から訳した」ともある(Творения святого отца нашего Иоанна Златоуста, архиепископа Константинопольского, в русском переводе. В 12 т. СПб.: Санкт-Пет. дух. акад., 1895—1906のことだろう)。木村がロシア語教師を務めていたと別の箇所に記されていることから、講話はロシア語からの重訳であったことがわかる。もっともこの時代にギリシア語原典からの翻訳を望むのは贅沢というもので、明治四十年(1907年)に出た『アウガスチン懺悔録』(宮崎八百吉訳、つまりアウグスティヌス『告白』の翻訳が英文を介したもので、ラテン語文からの訳が出たのは大正期に入ってからであったことを思えば、重訳であったこともやむを得ず、むしろロシア語文に忠実な訳がなされたことを評価すべきだろう。参考までに先ほど挙げた語彙にロシア語(旧正書法)を附すと、義鞫(правосудіе)、照管(промышленіе)、休徴(чудеса)となる。「鞫」の一字はロシア語から入ったと見える。

しかしこの校閲がなされたのは、折しも日露戦争が激化の一途をたどり、ニコライ自身、自教会への責任や愛着と日記にも滲み出る祖国愛の間で板挟みとなり、35年間ひとりも後続の宣教師を送ってこなかったと記して母国を恨みつつも——実際には何人が派遣されていたが宣教を継続しなかったようで、ニコライは怒りに任せて母国の同僚のせいにして——、それを見捨てたかに思える神に悲痛な訴えをし、実務においては政府を相手にロシア人捕虜たちの対応に奔走するなど、心身ともに休まらない日々を送っていたころのことであった(1904年10月19日の日記、同197頁)。日本海海戦の結果を知らされて数日後の日記にニコライはいう、ロシアは大陸国家としての国力を際限なき侵略に費やすのではなく「その大地を平和のうちに保有し、その資源を採掘し、国民の福利のために用いるべきであったろう。住民たちの物質的・精神的幸福に心を配るべきであったろう」(1905年5月20日、同196頁)。このように不安定な情勢のなか、『聖詠講話』の上編と中編とがそれぞれ1905年、1911年に出版された。下

編は残念ながら出版を見送られたらしい。翌年ニコライが没し、しばらくするとロシアの教会が社会主義政権下で受難したのもその一因であろう。そのことも、それ以降の日本正教会が聖師父著作の翻訳に継続して取り組む活力を失ったように見えることも、ニコライは残念がっていることであろう。いずれにせよこの贈物を受け取った「勝者」も、数十年後にはニコライの言葉を我がこととして聞くほかなくなる運命にあった。

著作としての『聖詠講話』はイスラエルから地中海、ロシアからシベリアへと渡り、日本でモノとして肉を得たことになる。壮大な旅といえよう。リレーの一区間を走った著者ヨアンネスの生涯に目を戻してみよう。398年に首都コンスタンティノポリスの大主教に叙階されたが、奢侈を非難して皇妃らと衝突し、また敵対する主教たちから一方的弾劾を受けて二度追放令を下され、408年に追放先で帰らぬ人となった。為政者の言葉に神の恵みを添えることだけをつとめとするような人ではなかったようである。ヨアンネスは、ニコライは、現代の世界をどう思うだろう。

ところで我が家に来た『聖詠講話 中編』はひとつのささやかな活躍をした。2021年に結婚した妻と相談し、翌年2月に埼玉県入間市の「旧石川組製糸西洋館」を借りて結婚写真を撮影したのだが、その折に妻から「古くて雰囲気のある本」を小道具として持参するようリクエストされたのである。偶然にもかつての洋館の主はクリスチャン一家であった。思いがけずこの一冊が手に入ってから一緒に写真に納まるまでに、私も一歩くらいは前に進めただろうか。その更なる旅路に泥を塗らないよう、今後も研究に励まなくてはなるまい。



※本エッセイを執筆するうえで、同専攻の博士課程に所属する小野成信氏には多大な助言をいただいた。感謝を申し上げます。

### 【私の研究室】

地域文化研究専攻・地中海小地域は、駒場キャンパス8号館に部屋を構える研究室である。創設の経緯から、教員・院生・学生を通して、大きく分けて二種の人々——ギリシア語・ラテン語・シリア語など古典語・古代語に研究言語を絞って文学・歴史・思想を研究する者と、地域をイタリアに定めたうえで中世～近現代のうちいずれかを足場とし研究する者——が共存している(拙文から自明であろうが、私は前者に属する)。

### (3) 石灰石から見る過去未来：オマーン南部地域の建築

トランス・コスモス株式会社 田窪 淑子(東京大学大学院工学系研究科修士課程修了)

#### オマーン南部の伝統建築材料

私が選んだ一品は石灰石だ。オマーン南部ドファール地方において、伝統的に建築に用いられてきた。現地で建築に使用される石には大きく2種類あり、どちらも石灰石あるいはそれに近い成分の岩石だ。

1つ目は、壁として積むブロックに使用される多孔質の黄土色の石。



壁として積むブロックに使用されている石

文献や石工への聞き取り調査では石の種類に関する情報は様々で、石灰岩と言わ

れたり、砂岩と言われたり、よりざっくりと堆積岩だと説明されたこともあった。ブロック状に切り出して積むことができれば石の細かい性質には拘らないようだ。

石の採取も街の色々な場所で可能で、調査で現地を訪れた際も集落の中や農地の中に石切場を確認することができた。はじめに幅110cmほどの大きな塊を切り出し、そのあと小さく切り分けるという。

石の大きさにも細かい決まりはなく、ブロックの大きさは概ね、長さ45-50cm × 高さ20-25cm × 幅20-25cmである。また、古い建築で使用されたブロックの再利用もしばしば行われるため、風化して角が丸まっていたりもする。ブロックを積む際は間に泥や小石を挟んで位置を調整するため、アバウトでも問題ないのだ。

2つ目は、壁の仕上げ材であるヌラ(nurah)の原料となる石である。文献や聞き取り調査では「白い石」と表現され、ワディ(涸れ川)や海辺で採取されるとのことだった。現地の石工の一人が海辺に案内してくれ、そこに落ちている石を拾ってこれがヌラの原料だと教えてくれた。角の取れた、直径5-10cmほどの丸い石だった。



ヌラにする際には、この石を加工する。地上につくられた焼釜または地面に掘った穴に石を木材や家畜の糞と共に入れ、2週間~1カ月間燃やす。燃え切った粉末状になったものがヌラで、日本の漆喰と似た材料である。

### ヌラの特徴

このヌラこそ、現地の人々が特にこだわりを持って使用してきた材料なのである。ヌラには、大きく2つの特徴がある。すでに少し述べたように石灰質であること、そして白いということだ。

はじめに石灰質であるということについて詳しく述べよう。

そもそもこの地域は大半が石灰質の土壌である。ヌラという呼称自体、アラビア語で石灰を意味する単語であるため、この性質が特に重要視されていたことが窺える。この地域のいくつかの地点で建物からヌラを採取し化学組成を調べたところ、確かに無機物元素の割合で82.4%のCaを含むということが示された。ちなみに石を積む際に間に挟む土はハトリ(khatiri)と呼ばれ(名前の由来は不明)、こちらも私の研究の対象であったのだが、化学分析の結果はCaが71.4%と高いことが示された。他の地域と比較すると、例えば日本の関東ロームではわずか2.5%とのデータがあることから、その割合の大きさが分かるだろう。

石灰質であることは、性能の面で重要だったと考えられる。この地域ではアラビア半島では珍しく、夏季に比較的たくさんの雨が降る。さらに数年から数十年に一度サイクロンが襲い、街は風雨の被害を繰り返し受けてきた。調査対象とした家屋の履歴を調べると、何度も風雨の被害を受けて修復を繰り返してきたことが分かった。



調査を行った家屋

夏季の期間、普段はしとしとと小雨が降る。時折訪れるサイクロンの被害は免れられないにしても、日頃の雨から外壁を守ることは重要だ。撥水効果のある石灰質の仕上げ材で外壁を良好な状態に保っていた

と考えられる。

次に、白いということについて。

白いヌラを外壁に塗っているため、サララをはじめとするドファールの街は白い。中東地域は乾燥した気候の場所が多く、木材が希少なため木造建築は少ない。よって土や石が主体の伝統的な建築は多くが土の茶色か石灰石の白、あるいは灰色の石をそのまま現しとしている場所では灰色となる。オマーン国内は各地で地理的特徴が異なるため、上記3つのパターンがいずれも見られる。北部では泥レンガ造りによる茶色の集落が多いのに対して、ドファール地方は白が主流だ。街並みや建築の外観だけではなく、屋内の壁もヌラで白く塗られる。

ただし、全ての建築が白いわけではない。というのも、ヌラは原料の石の入手場所が限られている上に製造に手間がかかるため、現地では高価で希少な材料として認識されているからだ。権力者などの富裕層の家屋やモスクでは壁の全面を白く塗れるが、それ以外の家屋では一部のみを白くする、壁の仕上げをハトリで代用する、ということもみられた。白いことは裕福さを示すものであり所有者の誇りでもあった。

### コロナ禍における石の実験

ところで、現地でもヌラや石を採取して実験を行ったと上述したが、その実験の期間はここ数年の新型コロナウイルスの世界的な流行と重なっていた。日本に留まらざるを得ない状況で現地の試料を分析することは、相応の困難さと同時に予想外の出会いや発見を伴うこととなった。

感染状況が深刻化する直前の2020年1月、私を含む調査チームは現地を訪問し、建物の壁や床・天井、建築材料の原料の採取地で試料を採取した。だが、それら全てをすぐに日本に持ち帰ることはできなかった。土やそれに準ずる物質をオマーン国外に持ち出したり、日本国内に持ち込んだりするためには、原則複雑な手続きを経る必要があるためだ。そのため試料を現地のカウンターパートの先生に預かってもらい、むしろ現地で実験することを検討していた。

当然、実験するのは私のはずだった。だが、間もなくこれは実現不可能になる。私は2020年度に1年ほど留学という形で現地に滞在し、フィールドワークをする計画を立てていた。そのため、留学期間中に現地の大学の施設を使用させてもらって試料の分析を行う予定であった。アラビア語を少し勉強し、公共交通機関が乏しい現地での移動手段を確保するために運転免許まで取得し、奨学金の採用も決まっていた。しかし世界中で新型コロナの感染が拡大し、渡航は見合わせる事となった。採取した試料の分析も、残念ながら私が行うことはできなくなってしまった。

そこで、実験に協力してくれる現地メンバーを探すことになった。すると、以前に東大に留学していた現地の地盤工学の先生に行き着いた。こちらの希望する実験の設備を備えているとのことで分析を快諾してくれた。何度かメールやzoomで実験内容について相談した後、すぐに実験結果が送られてきて無事に必要なデータを得ることができた。実験結果が出た際にもオマーンとzoomを繋いでデータについて詳しく説明してもらったのだが、質問をしながら考察したことについて議論を交わすことができ、急速に普及したWEB会議システムの有用性を強く認識することになった。

また、このことがきっかけでその先生の大学のシンポジウムで自分の研究についてオンラインで発表し、さらに論文を投稿する機会もいただいた。このシンポジウムは建築材料に限らず材料全般に関する研究を扱っており、建築史や伝統建築材料の研究をしている自分にとって新しい知見を得る良い機会となった。修士論文を書くうえで、別の角度からドファールの伝統建築を捉えることにも繋がり、研究に深みが出たと感じている。

新型コロナウイルスの感染拡大により現地に行けないことの影響は私にとってとても大きかった。だが、思いもかけない交流や共同研究の機会に恵まれ、自分自身の研究にとってむしろプラスとなることも多かった。私の経験のように、今回のことがきっかけでWEB会議等のシステムが発達し、国際交流がより活発になった面も

あるのではないだろうか。

### 現代のオマーン南部の建築

話を元に戻そう。石や土を用いた伝統構法について述べてきたが、現代では新しく建てられる建築はコンクリートブロック造のものにすっかり変わってしまった。しかし、現代建築にまで受け継がれているのは白のアイデンティティだ。申請をすれば色の濃い建築も建設ができるというが、そういった建築は一部に限られ、伝統的な白を基調とした景観が保たれていると言える。使われる材料はヌラからセメントや化学塗料に置き換わったが、白い建築を誇る価値観はヌラの時代から変わらず現地の人々に受け継がれているのだろう。

また、装飾に関してはドファールの建築はごく控えめだ。屋根にはギザギザとした造形が見られ、木製の窓や玄関の扉が綺麗に彫刻されているが、他の中東の建築と比較するとドファールの建築はとてもシンプルである。例えばアーチやヴォールトを用いた空間や、鮮やかな色のタイルなどはほとんど見られない。

ただし、このような白くて伝統的に装飾が少ないシンプルな建築は、外部から流入する様々な刺激の影響を受けやすいとも考えられる。

オマーン全体の経済的・文化的な面を考えると、脱石油が進められるとともに民間経済が盛り上がりを見せ、世界の流行を取り入れていく流れにある。ドファールに1ヶ月間滞在していた時、古びたサンドイッチ屋やティーショップと並んで、今風のコーヒースタンドが店を構えていた。オマーン人の青年がはにかみながらカフェラテを渡してくれたが、それは透明なカップに入った日本や韓国、欧米で若者が好むようなスタイルのものだった。現地でお世話になった先生によると、このような若者のスモールビジネスによるカフェは首都マスカットを中心に広がっているという。

建築についても、ネットを通じて世界の流行がどんどん取り入れられていくかもしれない。それでも、ヌラに由来する白い壁が、例えばコンクリート打ち放し風の仕上げに淘汰されることなくつくり続けられて欲しいと思う。現地では石灰石や砂岩

のブロックがコンクリートブロックに、ヌラがセメントや化学塗料に、置き換わりつつある。実際に古い集落では、一つの建築に伝統的な材料と現代材料が混在して使用されているものも見られた。また現地調査の際にヌラの原料となる石は確認できたが、それをヌラに加工するための燃焼窯等はほとんど残っていないようで、実際に見ることはできなかった。だが、日本で漆喰が見直されているように、ヌラの価値が再認識されて新しい建築でも積極的に使われる可能性は残されている。今後ドファールの建築が、伝統的に培われてきた知恵と意志を継承しつつ変化していくことを期待している。

### 【私の研究室】

私が所属していた建築史研究室は、東京大学生産技術研究所内にある。研究所には多様な理系分野の研究室が集まっているため、建築系の研究室に限らず様々な分野の研究にふれることができる。それだけではなく、異分野交流も活発に行われ、非常に刺激的な研究生活を送ることができる。

### 3. 駒場中東セミナー開催報告

東京大学中東地域研究センター(UTCMES)では、日・オマーン外交関係樹立50周年である昨年、さまざまなイベントを実施しました。11月に対面・オンライン併用で開催した公開シンポジウム「深掘り！ オマーン・スルタン国」には大勢の方にご参加いただきました。また、駒場博物館で開催中の「オマーン展」では、11月および12月にギャラリートークを開催しました。

2022年11月13日(日)

公開シンポジウム

「深掘り！ オマーン・スルタン国」

『アラビア半島オマーンの自然と地質そして人々』

宮下 純夫(新潟大学名誉教授/NPO法人北海道総合地質学研究中心)

シンポジウムの前半では、宮下純夫先生にご登壇いただいた。同先生は、25年という長期にわたって、オマーンで地質調査をされ、オマーンオフィライトをはじめとした世界に類を見ない地形を観察するとともに、現地の自然や人々と触れ合ってきた。その経験を踏まえて、オマーンが地質学において重要な地形を持ち、国際会議が開かれている理由の説明と、同国の自然や文化についての体験をお話いただいた。

まず、宮下先生は、ご自身とオマーンとの関わりについて語ってくださった。同先生は1995年にオマーンの地質見学旅行に参加されて以来、科研費を取得され、新潟大学をはじめ様々な大学が交代でホストを行う地質学的調査に携わってこられた。20年以上の間で、オマーンでの調査を題材にして、直接指導された人だけでも20人以上の学位論文の執筆に関わってこられた。オマーンは、世界中から数百人の学者が集まる大規模な地質学の国際学会が10年に一回開かれており、第2回以降は、日本人の研究チームも多く参加してい

る。宮下先生はそうした参加者の中の一人であった。

次に、オマーンがなぜ地質学的に重要であるかの説明をしてくださった。同国は、アラビア半島の東部に位置しており、北にホルムズ海峡がある。この海峡の対岸にはイランやアフガニスタンがあり、ちょうどプレートの沈み込みがある場所のため、地震が多いことで知られている。対して、此岸のオマーンは、プレートの衝突帯から外れた場所にあるので、太古にできた岩石が変形せずに残っている。そのため、オフィオライトと呼ばれる、過去の海洋プレートがアラビア半島に押し上げられ、そのまま陸に上がってきた岩石群がある。オフィオライト自体は世界各地で見られるのだが、オマーンのそれは断片化や変形が殆ど見られず、世界最大かつ、層構造が連続して見られるという点で世界最良の場所となっている。こうした変形の少ない構造から、例えば、オフィオライトにおける、海岸側から内陸へ向かう、溶岩層、シート状岩脈群、斑れい岩層、マントルかんらん岩の順に並ぶ、4層の層構造が解明された。この層構造は、たとえ海嶺にある地殻やマントルを掘り進めたとしても一部しか見えないので、陸地に露出しているという点で大変貴重な研究対象地形である。

宮下先生は、現地の写真を用いて、オフィオライトの景色とその重要性について説明してくださった。オフィオライトの中では、灰色の岩でできた急な斜面が、1マイルもの広さで広がっており、溶岩が一方方向に流れた跡を今に残している。この溶岩層の下にはマグマの通路であった岩脈群が広がり、その岩脈の下には、構造を持たない塊状はんれい岩があり、その下に、輝石やカンラン石からなる黒色の縞と、斜長石からなる白い縞が交互に並ぶ層状はんれい岩が見える。層状はんれい岩と、その下にあるカンラン岩の間には、モホロピッチ不連続面と呼ばれる構造が見られる。この地形は、地球の地殻とマントルの境界を表している。そこから水が湧き出て、オアシスが生じ、人々が集落を作っ

ている。また、モホロピッチ不連続面の遷移帯では、マントルのカンラン岩が変質し、蛇紋岩になる。その過程で、岩石に含まれる一酸化カルシウム(CaO)が水に溶け込み、空気中の二酸化炭素と反応して、炭酸カルシウム(CaCO<sub>3</sub>)になる。こうした天然の大規模な二酸化炭素の固定のメカニズムを調べることで、温室効果ガスである二酸化炭素の削減につながることで期待されている。

最後に、講師は、こうしたオマーンの豊かな地質的景観構造と人々のかかわりについて語った。同国には、グランドキャニオンのような切り立った地形があり、標高3000mにあるその頂上まで道路が舗装されており、車一つで行けるようになっている。また、同国の北端にあるムサンダム半島は、プレートの沈み込みによって、赤道近くにもかかわらず、複雑に入り組んだうねりを持つ海岸が見られるフィヨルド地形になっている。沿海部では、サンゴ礁やイルカがみられ、外国のクルーズ船が多数やって来る観光地となっている。さらに、オマーンでは急速な近代化が進んでおり、山間部へも電信柱や道路などの社会的インフラが整備されつつある。マスカットエクスプレスという高速道路がある他、奥地でも小学校や中学校が建てられている。現地調査の際に、宮下先生は現地の住民によく家に招待され、庭でフルーツやコーヒー、夕飯をごちそうされ、調査がなかなか進まないこともあったそうだ。

そして、研究への助成を受けた文部科学省や民間企業、現地の人々への感謝の意を表し、講演を締めくくられた。

(上笹のぞみ・東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻)

『オマーンの考古遺産 文化の長期持続性と変容』

近藤 康久(総合地球環境学研究所准教授)

はじめに

アラビア半島の考古地理学を専門とし、オマーンでは2007年から遺跡調査を行っている総合地球環境学研究所の近藤康久先生に、現地の考古学的発見につい

て、文化の長期持続性と変容という観点からお話を頂いた。

## 1. オマーンの地理的環境

現在のアラビア半島は超乾燥地帯に分類される。半島東端に位置するオマーンもこの例にもれず、東京の年間降水量が1602mmであるのに対し、オマーンの首都マスカットの降水量は101mmと僅少である。例外的に湿潤な南部のサララでも、年間降水量は136mmに過ぎない。ただし、地球の歴史を遡れば、13万年前のアラビア半島は現在より雨が多く温暖で、半島内に無数の古代湖が存在していた。一方で、2万1000年前の最終氷期極大期には、半島は現在よりも乾燥し、海水面の低下から湾岸が陸化していた。

## 2. オマーンの考古遺産

有形文化財のうち、考古学者が扱い、かつ未来に継承すべきものを、考古遺産という。近藤先生は、①パートなど考古遺跡群、②灌漑システムの「ファラージュ」、③タヌーフの洞穴遺跡群、④サララの伝統家屋を、考古遺産の例として挙げた。また、これらの考古遺産を考える上で重要なキーワードとして、「資源」、「社会」、「ネットワーク」を示し、これら3つの要素の重層性に聴衆の意識を喚起した。

今から1万2000年前頃から始まる新石器時代には、狩猟採集からオアシス農牧業への移行が起こった。5200年前に始まる青銅器時代は、ハフィート期（紀元前3300～2700年）、ウンム・アン＝ナル期（紀元前2700～2000年）、ワーディー・スーク期（紀元前2000～1600年）、後期青銅器時代（紀元前1600～1300年）という4つの時期に区分される。これらの時期には墳墓群や住民の遊動といった点に連続した特徴を認めることができる。また、鉄器時代には城砦がみられ、イスラーム期には、オアシス町が長期的に発展した。

### 世界遺産パート、アルフトゥム、アルアインの考古遺跡群

パートはオマーンの首都マスカットから西に約300キロ離れたハジャル山脈の

南麓に位置する。この遺跡には、ハフィート期から数千年にわたって使われ続けた墓域があり、ハフィート式円形墓からウンム・アン＝ナル式円形墓、ワーディー・スーク式配石墓などが確認されている。墓域は、交通路に沿って形成され、単に死者の埋葬を目的とするだけではなく、「道標」として社会・人的ネットワークの形成を促す機能も果たしていたと考えられる。また、社会集団の記憶を担う役割として墓地は増設され、時代を下るにつれて大型化していったという。さらに、石積の円形基壇（タワー）を町の中心に置き、家畜への給水などが行われていたこと、より時代が下るとタワーは本来の意味を失って記念碑として機能したことなどが指摘された。

これら遺跡群での発掘活動に関連して、近藤先生を始めとする日本の調査隊は社会貢献活動にも携わってきた。遺跡を保護する目的で設置されるバッファゾーン（建築を規制する緩衝地帯）の設定や、地域住民とのタウンミーティングの実施、地元の子どもたちに対する教育活動を実施していることが紹介された。

### ファラージュ

現在も使われている灌漑システムであるファラージュ (*falaj*; 複数形はアフラージュ *aftaj*) は、乾燥地帯で貴重な水資源の配分を行う社会インフラである。パート近隣のワディ・アル＝カビール盆地にあるアラリド遺跡で、ハフィート期またはそれ以前の時代に該当する紀元前4000年にまで遡る古代の水路址が発見された。現在のファラージュが水路網であると同時に社会ネットワークであることに鑑みれば、こうした古代の水路網も現在に続くような社会や文化の礎と捉えることができる。

### タヌーフの洞穴遺跡

日本の調査隊は現在、ハジャル山脈南麓のタヌーフで、洞穴遺跡の発掘調査を行っている。遺跡からは、ワディ・スーク期の土器片と、石製容器片、炭化物、ヤギの糞石、ナツメヤシの種子等が大量に出土した。これらの出土品から、洞穴では家畜が飼われていた可能性や、敵から身を守るための目的で利用された可能性、祭祀が行

われていた可能性などが示されている。また、洞穴下の斜面に墓地遺跡があることが確認された。

この洞穴の調査により、遊動的な社会の結節点としての洞穴利用という、新たな理解が得られた。また、のちのアラブ遊牧社会につながる社会的・文化的連続性も示唆された。

### 南部サララの伝統家屋

オマーン南部ドファール地方の中心都市サララでは、伝統建築の放置が課題となっている。先代の国王スルタン・カーブースが推進した1970年代以降の近代化に伴い、現代的生活には欠かせない電気・水のインフラ施設が整った新市街へオマーンの人々が家族単位で移動・移住することで、伝統建築からなる旧集落が放棄されたことが要因だった。さらに、サウジアラビアなど他の湾岸アラブ諸国と同様に、主に南アジアからの外国人労働者の増加に伴い、現地に特段の愛着を持たない住民が増えたことも、伝統を廃れさせ、歴史的遺産の保全を脅かす原因のひとつとなっている。

伝統の保全や歴史の維持には、現地調査におけるその土地の人々の理解や協力を得ることの他にも、考古学以外の学問分野との協同も欠かせない。オマーン政府も伝統が途絶する問題を意識してはいるものの、財政難や住民の関心を得られない問題、また南北による社会・建築文化の相違をうまく政策に反映させられていないことから、歴史保全に困難を抱えている状態にある。この点はパートの遺跡群やタヌーフの洞穴遺跡にも共通する課題だが、近藤先生はここに「資源」、「社会」、「人的ネットワーク」に加えて第四のキーワードとなり得る「文化の長期持続可能性」を加えた。過去から現在へ、そして未来へと続く社会的・文化的連続性についても、オマーンの考古遺産を理解する上で考慮に入れるべきだろうとの提言で、講演は閉じられた。

### 所感

世界遺産に登録されているにも拘わらず、観光資源として整備されていない点が特に印象的であった。交通の便の点から見ても、また看板がないことから、遺跡に



詳しい人、またはガイドさんを連れている人でもない限り、観光が難しいように思われた。より多くの人々にこうした遺跡について知ってもらうべく、また経済的観点からも観光整備が必要だと思う反面、観光を前提としないからこそ、こうしてありのままの姿で残されたようにも思え、現在の状況にも尊さを覚えた。

(綾野里咲・東京大学文科三類)

2022年11月5日(土)

駒場博物館「オマーン展」

第2回ギャラリートーク

『オマーンの青銅器時代：文化と社会の変容』

黒沼 太一(総合地球環境学研究所/日本学術振興会特別研究員PD)

「石油資源を利用しない持続可能社会を構築するためには、過去から学べることも大いにある。」そう語る黒沼太一先生は、オマーンの文化や社会の歴史の変遷を研究することで、未来のヒントを探している。今回は、人々が青銅器で出来た道具で日常生活を営んでいた青銅器時代のオマーンについて講演が行われ、当時の社会や銅の利用をテーマに活発な議論が交わされた。

オマーンは考古学的に南北に分けられ、南部はイエメン東部のハドラマウトの影響が色濃い。そこで今回は、急峻なハジャル山脈や海洋資源が豊富な沿岸部、砂漠地帯の内陸部を包含する北部に焦点を当てる。そして青銅器時代は、遺跡の特徴からハフィート期、ウンム・アン＝ナル期(前者と合わせて前期青銅器時代とも呼ばれる)、ワーディー・スーク期(中期青銅器時代)、後期青銅器時代に区分され、講義では各時代の生活様式や埋葬文化が紹介された。

ハフィート期(紀元前3300～2700年)

ハフィート期では、狩猟や牧畜など遊牧的な生活のみならず、一部で定住的な農耕が行われていたと見られる。その傍証として、直径20mほどの基壇と呼ばれる大規模な建築物が発見されている。基壇の用途については諸説あるが、金属の加工や製錬などが行われていた可能性がある。石器や銅製品、少数の在地土器が出土するほか、

南メソポタミアで作られたと推測される土器も見つかっている。

ハフィート期の遺跡は多数見つかっているが、そのほとんどが墓地であり、居住の痕跡は少ない(例、ラス・アル＝ハッドHD-6遺跡、アル＝ハシュバ遺跡)。墓地は山の稜線に築かれることが多く、麓から見やすい場所に位置する。これは、他集団に自身の活動範囲を示すためだと考えられる。一方で、河川の合流点に立地するものも多く、水資源と人々の暮らしの繋がりが示唆される。また、一つの墓に複数人を埋葬する集葬が行われていたことにも着目したい。

ウンム・アン＝ナル期(紀元前2700～2000年)

オマーンが文献史料で初めて言及された時代で、メソポタミア文明のアッカド帝国にとって「銅の産地」であることが記述されている。この時代には、オアシス農耕が本格化し、集落が内陸部・海岸部共に多く見られる。住居址は水系の近くに立地し、矩形のものが多く、一定期間使用して改修やリフォームが行われた跡も見つかっている。基壇も見つかっているが、その使い道は依然として不明であり、戦争時の避難場所、穀物貯蔵、水利関連施設(多くの基壇には井戸、場合によっては堀もあるため)などと提唱されている。なお、基壇は全ての集落にあるわけではなく、逆にパート遺跡のように、一つの集落に複数基が立地している場合もある。他にも、独自の文様を持つ在地土器や硬度の低い石材でできた石製容器、イラン・メソポタミア・インダス産の土器も出土している。

墓制は集葬が続いているが、直径7～8mと以前よりも大型化した。また、墓地内に間仕切りが施され、内部構造が複雑化した多様な形式が確認されている。

ワーディー・スーク期(紀元前2000～1600年)

ウンム・アン＝ナル期後期から全球的に乾燥化が進行したため、定住農耕が困難になった時代である。ただし、海岸部では局所的に農耕が続いた痕跡もあり、得られる資源によって定住できるか否かが左右

されたと考えられる。農耕を放棄した大多数の人々は牧畜や漁撈など遊動的な生活に回帰した結果、新しく建築物を作った痕跡も見つけづらく、ウンム・アン＝ナル期に作られた建物を再利用した遺跡(例、アル＝フトゥム遺跡)や、移動している最中に一時的に使った様子が残された遺跡(例、ムガーラ・アル＝キャフ洞穴遺跡)が増えた。一方、青銅器は作られ続けていて、注ぎ口のついた注口土器が出土し始める点も重要だ。また、集葬が放棄されて個別葬が始まったことも特筆すべき点である。

後期青銅器時代(紀元前1600～1300年)

ワーディー・スーク期以上に証拠が乏しく、どのような時代だったのか不明なことが多い後期青銅器時代。おそらく乾燥化の影響で移動生活が卓越したため、明確な証拠が残せなかったと考えられている。生活関連遺跡はほとんど残っておらず、墓も激減した。ただし、墓に土器や石製容器だけでなく、青銅器が大量に副葬されていた例があることも特徴的である(例、アル＝ワーシト遺跡)。

前期鉄器時代(紀元前1300～650年)

前期鉄器時代になると、ファラジュという地下水路が発明され、水を効率的に活用できるようになった。これは、現代オアシス農業の源流でもある、定住農耕の再開を意味する。また建築物として城砦が出現し、地域の中心地や避難場所を担った。ウクダト・アル＝バクラ遺跡では金属を加工する大規模な施設が見つかったほか、イラン西部のルリスタンで大量に出土したルリスタン青銅器も数点発掘された。

総じて、どの時代も生活様式が環境に規定され、埋葬習慣や物流など集団の在り方も変化した。また、水や土地の活用にも試行錯誤を続け、その成果としてさまざまな技術変革が起きた。一方、オマーンは一貫して古代湾岸世界の銅の供給地と交易中間点を担い、他地域と相互依存的に成立していた。気候変動や資源の枯渇が問題となる今日、我々も古代人の柔軟さが必要なかもしれない。

(後藤香織・東京大学理科二類)

2022年12月17日(土)

駒場博物館「オマーン展」

第3回ギャラリートーク

『古代馬と人々：オマーンとイランの撮影を通して』

佐藤 美子 (写真家)

今回のギャラリートークでは、駒場博物館「オマーン展」で展示されている、オマーンやイランで撮影した古代馬の写真を、撮影者の佐藤美子氏が、鈴木先生と対談するという形で紹介された。佐藤氏は、日本の国立民族学博物館で初めて個展を開催した、著名な写真家であり、世界各地の文化や社会の様子を鮮やかに映し出す記事を企画・執筆されている。今回は主に、イランで撮影した、アケメネス朝ペルシアの時代から家畜として人々の生活に深く関わった、『カスピアン』という馬について解説された。展示では、オマーン王立厩舎の写真が主だったが、ギャラリートークでは、民間人に飼育されている馬の様子も加えて紹介なさった。

まず、佐藤氏は、オマーンやイランの民間人と馬との関わりについての写真を紹介した。同地域で主に飼育されている馬は、大きく分けて三種類ある。

一つはアラブ馬で、オマーンの人々が乗馬用に多く用いている。人と馬の間には強い信頼関係ができており、人は鎧を使わずに騎乗したり、馬上で立ったり、馬具に高価な装飾を施したり、馬と鼻先を合わせてコミュニケーションをとったりする。特に最後の一例では、嗅覚の鋭い馬と、言語を介さなくても信頼や愛情を伝えあっているように見え、人間と動物とのコミュニケーションについて深い示唆を与えるような写真が紹介された。また、現代だけでなく、この地域では歴史上多くの人々が、アラブ馬と深い関わりを持っていた。例えば、アッパース朝時代の叙事詩では、アラブ馬は軍事に役立ち、ペルシア人の誇りであるとして賛美されている。

もう一つの種類の馬がカスピアンであり、講演の後半で掘り下げて語られる。小柄な身体と、短めだがジャンプ力の高い足、短い首、大きな目などが特徴である。カスピアンとアラブ馬が向かい合わせで

飼育されている写真も紹介されており、体格の差から、まるでカスピアンがアラブ馬にとっての仔馬かのように見える。こうした身体の小ささにもかかわらず、ギャロップ(馬がすべての足を地面から離して、一番速く走っている状態)のスピード以外は他の品種に劣らず優秀で、急旋回などの小回りが効くため、歴史上数々の王朝で、主に馬車用の馬として用いられてきた。例えば、アケメネス朝時代の円筒形の彫物では、ダレイオス一世がライオン狩りをする際に馬車に乗っており、その身体的特徴から、カスピアンではないかとされている。講演では加えて、川を渡るトルクメンという馬も紹介された。川を目前にして、佐藤さんが騎乗していた馬は緊張して身体が堅くなったことを感じたという。しかし、飼育者との信頼関係が成り立っているためか、川を渡りきる馬の姿を撮影することができた。また、イスファハーンでは乗馬クラブがあり、主として富裕層の趣味としての乗馬が盛んだ。最近では女性も増え、慣習による抵抗感はまだにあるものの、女性が馬との触れ合いを楽しむ姿も見られるようになってきた。

講演の後半では、カスピアンを発見し、その飼育や保護に尽力した、フィルーズさんというアメリカ人について解説された。イラン人男性と結婚し、イランに移り住んだフィルーズさんは、現地で小型馬を発見し、それが、アケメネス朝時代の遺跡、ペルセポリスに浮彫りされた古代馬であることを知った。そして、彼女は1971年以降、カスピアンを飼育し続けた。現在、カスピアンはイラン国内で保護の対象となっており、輸出が禁止され、文化遺産として大切に扱われている。フィルーズさんがカスピアン飼育に取り組んだ時期は、イスラーム革命やイラン・イラク戦争といった、国内外で政治情勢が大きく乱れた時期であり、政府による勾留や、パートナーや子供との別れなど、多くの悲しみを経験することとなった。それにもかかわらず、「馬の世話を放り出すことはできない。馬の命を守るために、悲しんでいる暇などない」という強い覚悟を持って、カスピアン保護活動に生涯を捧げた。そうした彼女の、馬や他の分野に関する幅広い知識、移

住先の文化の保護に捧げる並外れた柔軟性と熱意は、彼女が多くの人から尊敬を集める要因となった。

以上のように、オマーン・イランでは、アラブ馬やカスピアン、トルクメンという馬が、はるか昔から現代まで、人々の生活の中に大きく関わってきた。特にカスピアンに関しては、フィルーズさんというアメリカ人によって、激動の時代の中、古代馬として保護されてきた。こうした馬と人との時代を超えた関わりを、佐藤氏の生き生きとした写真によって、言葉だけでなく視覚的にもありありと感じることのできた講演であった。

(上笹のぞみ・東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻)

## 4. 「山内文庫」の思い出

山内 昌之（東京大学名誉教授）

研究とは予定通りにいかないものだと改めて感じた。今回、縁があって東京大学中東地域研究センターに寄付した一連の書物（いわゆる「山内文庫」）を見るにつけて、その思いを強くしている。問題意識や研究関心の道筋は大きく変わらないまでも、勉強する環境が変化するとテーマも一新せざるをえない。或る外国に出たなら、その国で可能な史料の探索による研究というものがある。誰でも、一定の問題意識をもって研究を始めた時には、体系的に目標と着地点を考えるものだが、なかなかそうはいかない。

私が最初に勉強した対象は、ロシア史とイスラム史の境界領域としてのロシア帝国あるいはソ連邦のムスリム民族地域の近代史であった。この関心の流れは、『スルタンガリエフの夢』や『神軍 赤軍 緑軍』などに結晶した研究につながった。それを書くために使ったロシア語文献やテュルク系文献も「山内文庫」に入っている。また、テュルク系方言辞典や旧ソ連を構成した諸民族の言語をロシア語で説明した辞書も含まれている。

最初に海外滞在したエジプトのカイロでは、この研究をそのまま継続できなかった。クリミア・タタール人のイスマイル・ガスプリンスキーがカイロで出したアラビア語雑誌『アル・ナフダ』を探しに、ナイル川沿岸のブーラクに出かけた時のことを思い出す。結局、そこでは発見できなかった。そこで出会った親切なアルシヴィストは、トルコ語やオスマン語が読めるなら、19世紀エジプトの政治外交史をやればよいのではと、懇切な助言を受けた。ちょうどブーラクからカラア（シタデル）に文書館が移ったばかりだから、そちらに通えばというアドヴァイスなのである。これが『オスマン帝国とエジプト』を書くことになるそもその濫觴であった。この時に買い求めたアラビア語とフランス語の書物が、寄付した「山内文庫」の一つの塊である。19世紀の外交文書ドキュメントや法令集に加えて、フランス語

によるポーランド人軍事顧問団やロシア人顧問団の報告書など、19世紀ムハンマド・アリー治下のエジプトを観察した外国人の観察や報告を収めた本である。これらはエジプト王立地理学協会の出版物であり、当時は苦心して集めた文献であった。これは、ロシアやカフカースとのつながりを、自分なりに何とかして維持しておきたかったからだろう。今となってみれば不思議なのは、英仏の国際関係やエジプトの南下政策をオスマン帝国やロシアを含めた国際関係史の大きな文脈で整理する関心を持っていたことだ。このなかにはかなり基本史料としての質が高い文献が入っている。エジプト史学草創期の研究者によるアラビア語や英語研究書を見るにつけて当時の問題意識が蘇ってくるのである。

アンカラに滞在した時は、トルコ独立戦争期のキャズィム・カラベキルを軸にした対ソビエト関係を中心に勉強した、その主な成果は、『納得しなかった男』『中東国際関係史研究』として結晶したが、今回の「文庫」にも関連した文献が入っている。これらの研究は主に文書館の未公開文書を史料としたので、文献史料としては政治家や軍人たちの回顧録などが中心である。ただし、アンカラの国会に出かけて入手した独立戦争期の『大国民議会議事録』『秘密会記録』などは、今後の研究者にも資するところがあると信じている。さらに、独立戦争期の国際関係史についてギリシアを含めて立体的に描くことを志したので、アテネの参謀本部出版局にわざわざ出かけて、ギリシア陸軍による『小アジア作戦』についての公式戦史（現代ギリシア語）も揃えたことを懐かしく思い出す。今回の寄付文献のなかにもほかのギリシア語文献と一緒に入っている。実際の研究では、これらの書物をととも読むまでに至らなかったのは残念である。

ハーバード（マサチューセッツ州ケンブリッジ）にいた時の文献収集は、通常の研究書や資料集が中心であるが、ソ連の民族問題、湾岸戦争からソ連解体に至る激動の

時期を写す基本的価値の高いものも入っている。これらとつながる研究として、前後して出されたのが『瀕死のリヴァイアサン』や『ラディカル・ヒストリー』なのであった。

以上のように、その時々の研究環境と問題意識に応じて異なるテーマに関心を抱き、学んできたが、私のようなタイプの研究者には、ひとまず関心を抱いた仕事をまとめるとそれに満足してしまいがちだったのだろう。ほとんど着手できなかったテーマには愛着も残る。あの時にもう少し勉強しておけばよかったという悔いのみが残る。それも研究者人生というものなのだろう。それでも、勉強する志を少しでも忘れずに、まだ手元に残している辞書類や史料集もある。しかし、これらを寄付するには今の学部のスペースでは手狭だそうである。ここで触れた書物以上に新たな時代に役立つような手持ちの文献史料を寄付し収納できる空間を一日も早く作っていただくことを、学部当局の皆さんに心からお願いして蕪雑な文章を終えたい。

## 5. センターの活動紹介

### 駒場博物館収蔵庫の見学

2022年12月13日(火)に、駒場博物館助教の折茂克哉さんの案内で、UTCMESスタッフが収蔵庫に置かれたカブース講座関連の物品を見学しました。長らく収蔵されたままの物品も多く、活用法を検討していたところ、額飾りの一部をUTCMES事務室で展示することになりました。ご来所の際には、ぜひご覧下さい。



### 『教養学部報』に記事掲載

2023年2月5日発行の『教養学部報』第643号に、UTCMESが2022年度に開催した日本・オマーン外交関係樹立50周年事業についての記事が掲載されました。記事は、東京大学教養学部のWebサイトから参照が可能です。



### 駒場博物館内「オマーン展」の開催

駒場博物館で常設展示「オマーン展」が、2023年6月まで開催されています。写真家の佐藤美子様、駐日オマーン・スルタン国大使館、東京大学総合博物館などから提供を受けた貴重な資料が展示されています。



### ●UTCMESスタッフ紹介 (2023年3月31日現在)

#### 〈スタッフ〉

高橋 英海 (センター長、兼務教授)  
荻谷 康太 (兼務准教授)  
鈴木 啓之 (特任准教授)  
瀬口 美加 (事務補佐員)

大塚 修 (兼務准教授)  
森元 誠二 (客員教授)  
倉澤 理 (パフワーン文庫・特任研究員)

#### 〈UTCMES運営委員〉

高橋 英海 (委員長、総合文化研究科教授)  
荻谷 康太 (総合文化研究科准教授)  
真船 文隆 (総合文化研究科教授)  
菊地 達也 (人文社会系研究科教授)

大塚 修 (総合文化研究科准教授)  
清水 晶子 (総合文化研究科教授・副研究科長)  
黛 秋津 (総合文化研究科教授)

#### 〈スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座運営委員〉

高橋 英海 (委員長) 大塚 修 荻谷 康太 橋川 健竜  
清水 晶子 真船 文隆 黛 秋津

### ●発行者情報 UTCMESニューズレター VOL.22 2023年3月31日発行

発行：東京大学大学院総合文化研究科グローバル地域研究機構中東地域研究センター(スルタン・カブース・グローバル中東研究寄付講座)  
〒153-8902 東京都目黒区駒場3-8-1 TEL：03-5465-7724 FAX：03-5454-6441  
<https://park.itc.u-tokyo.ac.jp/UTCMES/>

編集補助：木村風雅、岡本優加子

印刷：佐川印刷株式会社 〒140-0004 東京都品川区南品川5-2-10 TEL：03-5715-0802 FAX：03-5715-0752